

## 島根県の学校医数に関する研究

貴 谷 光 浅 の 博 雄  
 山 崎 一 成 はた 野 博 雄  
 やま さき かず しげ はた の ひろ お  
 山 崎 一 成 秦 博 正 ただし お

キーワード：学校医，眼科学校医，耳鼻科学校医

### 要旨

島根県の学校医数の実態について調査した。内科・小児科系学校医は充足していたが、眼科学校医、耳鼻科学校医は不足していた。学校数で約40%，生徒数で約23%程度は委託眼科医、委託耳鼻科医の健診を受けていた。各市町村の努力にも限界があり、何らかの対策を打ち出す必要があると考えられた。

### はじめに

島根県の学校医の現状について調べるため、学校医数について調査した。市町村立学校における生徒数、学校医数について解析を行った。

### 方 法

県内19市町村の教育委員会等に電話等で連絡を取って実数を調査した。生徒数はH30年度の、学校医数はH31年4月時点のものとした。

### 結 果

1. 島根県には19の市町村があり、100校の中学校に生徒数17,596名、203校の小学校に生徒数34,801名であり、学校医総数288名であった。学

校医のうち、内科・小児科系が235名、眼科32名、耳鼻科20名であった。(表1)

2. 内科・小児科系学校医数は、235名であり、最多は出雲市で57名、次いで松江市42名で、1名のみの市町村は3市町村であった。すべての市町村で学校医を確保できていた。

3. 眼科医は県下に72名で、開業医45名、勤務医25名、その他2名であった。眼科学校医は32名で、開業医の71%が学校医を務めていた。6市町村、中学校57校(57%) 生徒数13,501名(77%)、小学校125校(62%) 生徒数26,885名(77%)を担当しており、眼科医不在の市町村は13であった。眼科学校医の分布は島根県東部に25名、島根県西部に7名となっており、東部に偏在していた。眼科学校医不在の13市町村では、島根大や近隣の開業医に委託して健診を実施していた。特に隠岐部

Hikaru KITANI et al.

きたに内科クリニック

連絡先：〒690-0021 松江市矢田町478-5

きたに内科クリニック

表1

市町村	人口	小学校数	小学生徒数	中学校数	中学校生徒数	内科・小児科系	眼科系	眼科委託	耳鼻科系	耳鼻科委託
松江市	204428	35	10831	19	5388	42	10	0	7	0
安来市	38032	17	1921	5	1052	17	3	0	1	0
雲南市	37012	15	1817	7	966	17	0	3	0	2
奥出雲町	12175	10	524	2	284	5	0	2	0	2
飯南町	4772	4	228	2	90	5	0	1	0	1
出雲市	172947	37	9712	16	4775	57	12	0	8	0
大田市	33417	16	1602	6	840	15	2	0	1	0
川本町	3183	1	121	1	58	1	0	0	0	1
美郷町	4534	2	243	2	111	3	0	1	0	1
邑南町	10569	8	484	3	228	5	1	0	0	1
江津市	23582	7	1014	4	561	13	0	1	0	1
浜田市	55772	16	2553	9	1322	21	4	0	3	0
益田市	45911	15	2409	11	1221	18	0	2	0	2
津和野町	7197	4	266	2	124	3	1	0	0	1
吉賀町	6146	5	221	4	133	3	0	1	0	1
隠岐の島町	14109	7	635	4	346	6	0	1	0	1
海士町	2296	2	99	1	37	2	0	1	0	1
西ノ島町	2886	1	101	1	37	1	0	1	0	1
知夫村	658	1	20	1	23	1	0	1	0	1
総計	679626	203	34801	100	17596	235	33	15	20	17

では鳥取大眼科の支援を受けていた。眼科健診が実施されなかったのは川本町のみであった。

4. 耳鼻科医は県下に46名で、開業医26名、勤務医20名であった。耳鼻科学校医は21名で、開業医の81%が学校医を務めていた。5市町村、中学校55校（55%）生徒数13,377名（76%）、小学校121校（60%）26,619名（76%）を担当していて、耳鼻科学校医不在の市町村は14であった。耳鼻科学校医の分布は島根県東部に17名、島根県西部に4名となっており、眼科学校医と同様に県東部に偏在していた。耳鼻科学校医不在の14市町村では、眼科と同様に島根大や近隣の開業医に委託して健診を実施していた。特に隠岐部では島根大耳鼻科の支援を受けていた。全ての市町村で耳鼻科健診が実施されていた。

## 考 察

学校医の職務は学校保健安全法施行規則第22条に規定されており、約10項目にわたっている。職務の中心となる学校健診では近年次々と項目が追加されてきている。内科・小児科系では運動器健

診（側湾など）、成長曲線の評価（肥満など）が、眼科では色覚検査（任意）が加わった。また健診項目ではないが、教職員のストレスチェックも追加されている。すなわち、少子化に伴って学校医の負担が減るのではなく、むしろ増加している現状がある。

一方県内では過疎地が少なからず存在し、学校医の確保が困難な市町村も存在するが、ここ最近のまとめた報告はない。筆者は県内の学校医の状況をまず数的に把握すべく今回全県下の市町村に調査を実施した。その結果19の市町村全てから回答を得ることができた。それをまとめたのが表1である。

内科・小児科系の学校は総数235名で、全ての市町村で学校医を確保できていたが、1名のみが3市町村存在した。今後の動向に注目したい。内科・小児科系学校医の最多は出雲市の57名、次いで松江市の42名であった。人口の多い松江市より出雲市において内科・小児科系学校医が多い理由としては、島根大医学部があり医師数に恵まれていること、小規模の学校が出雲市に多いこと、松江市に島大附中（国立）、開星中学・松徳学院

(私立)など3校が出雲市には出雲北陵(私立)の1校が存在するがこの統計調査には含まれていないこと、などが考えられる。

眼科学校医は32名が務めていて、生徒数で小・中学校の77%を担当していた。眼科学校医は少数のため、医師一人あたりの担当数が多い。診察に多くの労力を割いておられることが推察された。眼科学校医の仕事としては、眼疾患の診察、眼位検査等があり、1日当たり200名程度が限界と伺っている。県下の眼科医数をみると、今後現状維持がどこまでできるかが懸念される。

耳鼻科ではさらに深刻な医師不足の現状が明らかにされた。眼科学校医より約10名少ない状況で、ほぼ同数の小・中学校の76%を担当されている。1名当たりの担当数も多く、診察により時間を割いておられると推察される。耳鼻科医師に尋ねると1日に診察可能なのは200名程度とのことであるから、連日診察していただいていることになる。松江市医師会では今年から教育委員会、耳鼻科医会と相談して、耳鼻科学校医の健診時負担軽減策を実施している。その内容は、小規模校は全数、大規模校は小学校で1・3・5年、中学では1年の抽出というものである。中耳炎、副鼻腔炎などの感染症が減少し、アレルギー性鼻炎が増加している現状を考えての対策である。

令和元年8月18日に広島市で開催された中国四国医師会連合学校保健担当理事連絡協議会でも、学校医不足問題が取り上げられた。鳥取県西部の耳鼻科医会では約10年前からマンパワー不足を理由に抽出制が導入されているという報告があり、松江市と同様の状況であることが推察された。また、愛媛県西条市、内子町では眼科・耳鼻科健診が実施されていないという報告もあり、より厳しい状況の市町村もあることが判明した。

島根県全体を見渡すと、県東部、県西部、隠岐の医師数の差は歴然としている。現在健診は6月末までに行うこととされているが、これはおそらく水泳授業を念頭に置いたためと思われる。水泳授業が縮小されつつある昨今、健診の実施時期を8月～9月まで延長するなど、弾力的な運用を検討して欲しい。そうすれば、県東部の医師が県西部や隠岐に出向くことがより容易になるかもしれないからである。

学校医の先生方の頑張りがこの調査を通じて明らかになった。しかし、いつまでも頑張っていたく訳にはいかない。種々の対策を考えるべき時期に来ていると思われる。

**文献:**なし

**利益相反** 開示すべきCOI (Conflict of Interest) 関係にある企業はありません。